南無阿弥陀仏は
私のいのち

えこお
平成24年
7月号
NO.
414
7

〒110-0012 東京都台東区竜泉 1-20-19
発行所 真宗 佛光寺派 西徳寺
TEL 03-3875-3351 FAX 03-3875-6796
http://saitokuji.tobiiro.jp/
発行人 岸本 秀一
印 刷 日生印刷(株) 03-6863-3263

# 今ここにいる

私が生まれ育ったのは滋賀県米原市という所で北部に位置し、豪雪地帯として知られている。家を一歩出て辺りを見渡せば山や田畑が一望出来るような、所謂「田舎」である。そのような田舎で生まれ育ち高校を卒業するまで過ごしてきたわけだが、当時は一刻も早く田舎を出たいという思いが強かった。

それから十数年が経ち今は東京にいる。実家を離れ便利で快適な都会暮らしを満喫しているが、正直なところ実家に帰るとホッとする。実家には、言葉で説明出来ないような居心地の良さがある。

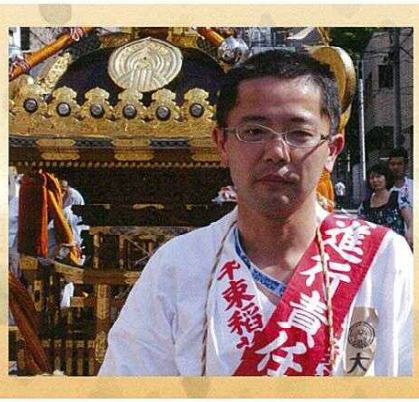
しかし、それは田舎の良さに気づいたというだけではない。便利な都会と不便な田舎とを比べるのでもない。今私が、過ごしやすいかどうか、この一点なのである。つまり、自分の満足だけを求めている。条件が整えばどこでもいいのだ。

このことに気づいた時、自分の身勝手さが見えてくる。人は皆、好き勝手な処で生きている訳ではない。やむを得ず、結果として「今ここ」を生きることとなったのだ。

二〇一一年には、わずか一年間で四三〇万人もの難民・避難民が発生したという。私は、与えられた「ここ」を今生きているのであろうか。

群生海

# 地元愛




台東区在住　水鳥（みずとり） 靖大（やすひろ） さん

今回は小学校の活動に尽力されている水鳥靖大さんにお話を伺います。

## 母校を大切にしたい

学校や子供達とお父さんがもっと関われたらという趣旨で四年前、スクールサポーターズという会が結成されたんです。

実は会名の候補に「親父（おやじ）の会」というのがあったんですが、事情で父親がいない子もいるという配慮から採用されませんでした。でも、自分の子に限らず父親の代わりをしていこうという願いがあるんです。

最初は子供達のドッヂボール大会やビーチバレー大会等の応援から始まり、今では自分たちも参加し、子供達以上に楽しんでます。

子供達と顔見知りになって、人の子がかわいいと思うようになりました。だから注意したり叱ったりすることが自然にできるんです。

## 活動を認めていただいた

昨年、台東区からその活動を評価されて表彰されたんですが、本当に驚きました。運動会の自転車整理や盆踊りの焼きそば屋台等を通じて他学年の父兄との交流が増えたりして楽しんでるんです。自分たちが楽しめば楽しむほどに表彰していただいたことは本当に勿体なく、光栄なことだと感じるんです。

## やっぱり地元が好き

しかし自分でもどうしてそこまで時間や労力を割いているのか分からないんです。でも、自分は千束小学校の卒業生で、母校愛が根底にあるのは間違いありません。それは地元愛にも通じているんです。やっぱり地元、千束が好きなんでしょうね。

地元は自分が生まれ育ったところとしか言いようがないけども、代々、先輩方が築き上げてきて下さり、またそれを受け継いで伝えてきて下さった方々がいる。そこに歴史を感じるんです。自分もその一員になりたいと思うんです。ですから今回、表彰していただいたことは一員にさせていただいたような気がして嬉しいんです。

先輩方から色々なことを教えて頂きました。その先輩方も教わってきたと言われるんです。そうであれば、自分は教わったことを後輩や子供達に伝えなきゃいけないんです。

地元って、そうやって私を育ててくれた所なんです。だからこそ時間を割いてでもスクールサポーターズに一生懸命になってしまうのかもしれませんね。そういう関係の中で伝統文化も伝わってきたんだと思います。

（聞き手　山崎　哲）

## なんで？⑧「永代経」

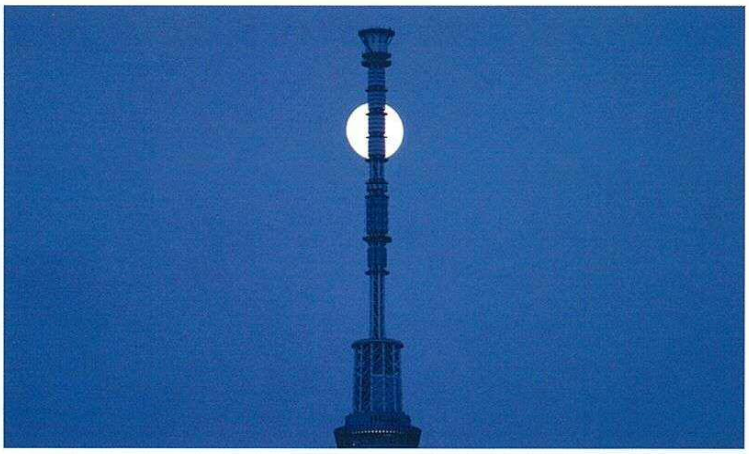
一般的に永代経とは、御布施を受けお寺で先祖の命日等に永代にお勤めすることとして知られています。祥月命日にお勤めするので祥月経ともいわれます。西徳寺では、祥月命日の他に両彼岸にも合同の永代経を勤めています。

真宗に於いて永代経とは、仏法が永代に受け継がれてゆくことです。それこそ、釈尊の時代から伝えられてきたお念仏のみ教えを、私達にまで、そして孫子の代まで伝えていくのが永代経です。

勿論その背景には、永代経にあたり、納めていただいた御布施によってお寺が護持され、また、仏法に出遇わして下さる大切な場所として、お寺が開かれてきたわけです。

そういう意味で、先祖の命日を縁とし、仏法に出遇わして下さることとして「永代経」が勤められてきたのです。

（大橋　伊知郎　記）



# 正信偈の話⑪

松井憲一

**普放無量無辺光、無碍無対光炎王、清浄歓喜智慧光、**
**不断難思無称光、超日月光照塵刹。一切群生蒙光照。**

（あまねく、無量・無辺光、無碍・無対・光炎王、清浄・歓喜・智慧光、
不断・難思・無称光、超日月光を放って、塵刹を照らす。一切の群生、光照を蒙る。）

十二光の十番目は、難思光で、凡夫の想定では量ることのできない阿弥陀仏の智慧の光です。親鸞聖人は、難思光について、「仏光測量なきゆえに 難思光仏となづけたり 諸仏は往生嘆じつつ 弥陀の功徳を称せしむ」（阿弥陀仏の光は、人間のはかり知ることでないから難思光仏といわれる。阿弥陀仏の光に出遇って往生できる功徳を、諸仏はともにほめ讃えられる）」と和讃されます。

良い成績表で、ファックスで祖父母に送る孫がいるかと思うと、通信簿はプライバシーだからと、見せぬ孫もいます。老いも若きも、自己主張と自己弁護。朝から晩まで煩悩をおこして、計算通りになることが最高の人生だと思っています。はたしてそうかと、生きがいを求めて仏法に聞けば、「うらの仏法は、ごまかし仏法、尊いお方の真似をして、自分の胸に、ひっつけて、わが物顔に書いて見て、ひとをごまかし、自分は溺れ、溺れを知らずに、溺れてる」（『浮草抄』前川五郎松）という自分が見えてきます。

自分には闇しかないと落ち込んでも、闇が闇だと気付けたのは、阿弥陀仏の光に照らされたからです。愚かな自分に気付かされたのは、阿弥陀仏の量り知ることのできない難思光のおかげです。こうして、仏の国を願う人は、闇が自分だと知らされますから、自分の思いで人生をおし量る必要のない、豊かな生きかたをたまわります。この豊かな人生こそ阿弥陀仏の功徳であると、諸々の仏たちが、褒め讃えてくださるのです。

十一番目は、「無称光」で、人間の思いではいい尽くすことのできない阿弥陀仏の光です。親鸞聖人は、無称光について「神光の離相をとかざれば 無称光仏となづけたり 因光成仏のひかりをば 諸仏の嘆ずるところなり（阿弥陀仏の光は、すがた形を離れているから、言葉で表現できないので無称光という。この光の無量を完成した阿弥陀仏を、諸仏はほめ讃えられる）」と和讃されます。

肉眼は、外を見るようにできてますから、自分の眼の限界に目覚めよという阿弥陀仏の内にくい込む光は、自分の眼では見えません。だから、阿弥陀仏の光を説明すればするほど、自己理解に埋もれて、迷いを増幅します。しかし、ほめることもたたえることもできない私を、見ていてくださる、照らしていてくださると、お育てを感じることがあります。親鸞聖人が因光成仏に、「光きはなからんと誓い給ひて、無碍光仏となりておはしますと知るべし」と左訓されるのは、闇であると頷けたのは、「光きはなからんと誓」われたはたらきであったと実感されて、「知るべし」と念をおされたのでしょう。

この、「光きはなからん」という誓いに、闇が知らされて目覚めいく人々が生まれ出ることを、「諸仏の嘆ずるところなり」とほめられるのが、諸仏です。諸仏は、私に先だって、阿弥陀仏の光に出遇い、あるがままの世界を歩んでおられるのです。その諸仏に出遇ってしぶとい頭が下がると、無数の諸仏はすでに念仏せよと、叱咤激励されていたと、知らされるのです。わたしたちは、この諸仏のほめたもう言葉に押し出されて、同じ南無阿弥陀仏の道を歩むことができるのです。

# 山門の言葉

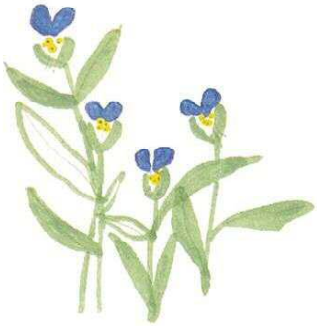
## 生のみが我等にあらず、死もまた我等なり。

今月の言葉は真宗大谷派の僧侶、清沢満之師からいただきました。

清沢満之は三十二歳のとき、当時不治の病とされていた結核を病んで死に直面し、真剣に生死を超える道を求められた。私たち人間にとって最大の不安である死に向き合うことを通して、死によって終わってしまわないような生の意味を見いだしていかれたのである。その中で自覚された言葉であるといわれている。

実は私の高校時代の友人が心臓発作で急死して、今年でちょうど十年になる。毎年墓参りには行っているのだが、今年は十年ということで、本当は回忌に当たらないのだが、夏に法要をする予定である。

彼は十九歳という若さで亡くなったということもあり、私の中には非常に強く印象づけられている。死ということはどこか自分とは離れた問題と思っていたのだが、同い年の友人が亡くなったということで、「自分たちもいつ死ぬか分からない」ということを知らされた。



しかしそんな思いも長続きせず、普段は生きること、それも自分勝手に思い描いている生のみに眼を向け、自分がいつ死ぬか分からないなどと思わず生活しているのが私である。

もっと生きていたかったであろう彼の生涯は思わぬ形で終わってしまった。それは誰にでも言えることで、普段「私が生きている」と、いのちを自分のものと思っている私に、「お前の生涯も思わぬ形で終わる」と教えているように思う。

毎年墓参りをすると、一緒に行く友人が「今日みんなを集めたのはあいつなんだな」と言う。人は死ぬことで完結するのではなかった。私たちは生の延長上に死を考えるが、結果的に死に帰すというという点から、死から生をとらえ直すことの大事さを思う。「死もまた我等なり」とは死から聞いていく生ではないだろうか。

いつ死ぬかは分からない。だから今を懸命に生きろと、彼から喚びかけられているのだ。

（仲井　真裕　記）

## 葬儀あれこれ 3

一晩中、遺族がご遺体の傍でロウソクの灯火や線香を絶やすことなく見守り、故人との別れを悼む夜を通夜とよんできました。亡くなったばかりの故人が、この世でもあの世でもない世界を彷徨（さまよ）っているために、道に迷わず成仏するように足元を照らす明かりが灯火であり、線香から立ち上る煙は、あの世への道標となるように焚くのだと思われています。

最近では故人を偲ぶことはもとより、残された遺族との関わりに対する弔問が中心になりつつあります。会社を終えてから（仕事帰り）の時間で焼香できる利便性からも、葬儀より通夜に参列される方が増えてきました。

仏事とは本来、私が仏の教えに出遇うことが願われています。そのために亡き人は尊い仏縁となって私によびかけて下さっています。生まれてきた意義も知らず、眼前の出来事に翻弄されて右往左往するばかりで、この世を彷徨っているのはむしろ私の姿であったと気づかせていただきます。教えによって照らされるべきは、実は私の足元だったのです。

（木村 専正 記）

## えこお志お礼

| | |
|---|---|
| 三重県 | 長徳寺 様 |
| 豊中市 | 最勝寺 様 |
| 新潟市 | 巌念寺 様 |
| 大阪市 | 西光寺 様 |
| 堺市 | 高照寺 様 |
| 青森市 | 蓮得寺 様 |
| 江戸川区 | 斉藤 繁隆 様 |
| 藤沢市 | 丸山 和之 様 |

## 日誌

| | |
|---|---|
| 5月17日 | 教行信証『信巻』に聞く（第79回）<br>講師　宗 正元師 |
| 5月19日 | 定例聞法会 |
| 5月20日 | 城西ブロック会総会・聞法会<br>（中野商工会館　参加者17名） |
| 5月23日 | 婦人会聞法会<br>本山リーフレットに聞く「私のいのち」 |
| 5月26日 | 同行会「正信偈の教え」に聞く<br>法話　高橋 淳 |
| 5月27日 | 城南ブロック会総会・聞法会<br>（大井町きゅりあん　参加者17名） |
| 5月27・28日 | 宗祖忌 |
| 5月30日 | 勝友会布教大会（参加者　約100名） |
| 6月1日 | 評議員会定例役員会 |
| 6月2日・3日 | 仏教青年会研修旅行<br>（熱海方面　参加者8名） |
| 6月7日・8日 | 中興忌 |
| 6月9日 | 同行会「正信偈の教え」に聞く<br>法話　蓮井 邦宗 |
| 6月10日 | 城東ブロック会総会・聞法会<br>（人形町　香港美食園　参加者28名） |
| 6月12日 | 責任役員会・総代会 |
| 6月13日 | 婦人会聞法会<br>本山リーフレットに聞く「ほとけの子」 |

# 掲示板

## 平成24年 7月

4日(水) 午後1時　**婦人会聞法会**
本山リーフレットに聞く「親を殴りたい!?」

7日(土) 午後6時　**同行会「正信偈の教え」に聞く**
法話　岸本住職

13日(金)～16日(月)　**孟蘭盆会**
(10日よりお盆体制になり、新盆を中心に
お宅にお参りさせて頂きます)

21日(土) 午後3時半　**混声合唱団「エコー」練習**

24日(火) 午後7時　**仏教青年会「歎異抄」に聞く**
講師　宗 正元師

28日(土) 午後3時半　**混声合唱団「エコー」練習**

## 編集後記

五月三十日、西徳寺本堂において勝友会主催の「布教大会」が開催され、四人の布教使からご法話をいただきました。全国から参集された約五十名の布教使と参詣者で本堂は満堂となり、最後まで熱心にご聴聞くださいました。

四月の「大遠忌法要」とこの度の「布教大会」が『文化時報』誌に掲載されました。ご希望の方はコピーを用意しておりますので寺務所までお申し出下さい。

(主任 木村 記)

西徳寺ホームページアドレス：http://saitokuji.tobiiro.jp/